

総合講座「諸国語概説」報告



慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスに
おける外国語教育の試み

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス
言語コミュニケーション研究所

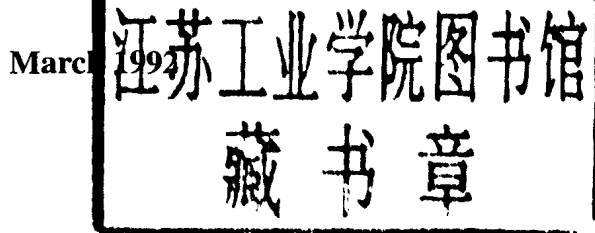
SFC ロゴス叢書 1

総合講座「諸国語概説」報告

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおける外国語教育の試み

総合講座「諸国語概説」報告 編集委員会編

March 1994



慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス
言語コミュニケーション研究所

「SFCロゴス叢書」発行にあたって

1990年4月に開校した慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（通称 SFC）では、外国語教育の革新を目指して教員たちは並々ならぬ努力を傾注してきた。SFCにおいては教育にたいする貢献を評価する姿勢をはっきりと打ち出し、従来のともすれば研究を偏重する慣行から大きく脱皮してきた。こうした方針は研究を軽んじるのではなく、研究と教育の関係をあらたに問い直し、若い学生たちを引きつけるような質の高い授業を実現したいと考えたからだった。2年間の私たちの努力は各方面から注目を浴び、たくさんの訪問客を迎えたのは事実ではあるが、まだまだ私たちのやるべきことは少なくない。時には、あまりにも教育にかたよりすぎ、一体それで研究する時間があるのですか、と問われたこともあった。

幸い開校3年目を迎えるにあたって、「言語コミュニケーション研究所」から次々に研究成果が刊行されることになった。多忙な雌伏の時期、教員たちは満を持していたのであろう。SFCにおける研究発表はどういう形であるべきかを紀要委員会が検討した結果、「SFC JOURNAL OF LANGUAGE AND COMMUNICATION」を定期的な刊行物とする一方、さまざまなテーマをモノグラフにまとめ、「SFCロゴス叢書」を出版することにした。この「SFCロゴス叢書」第1号はSFC独特の語種選択システムである総合講座「諸国語概説」そのものを対象とした報告書である。教育の現場をどうデザインするかという問題自体がすぐれて研究対象であるというSFCらしい出発ではないかと思う。このモノグラフの刊行をもって「言語コミュニケーション研究所」に属している教員すべての共同研究第一号としたいと思う。多くの方々の率直なご助言、ご批評をいただければ幸いである。

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）

言語コミュニケーション研究所所長

井上 輝夫

Der Sprachunterricht muss umkehren!

- Quousque Tandem, 1882

目次

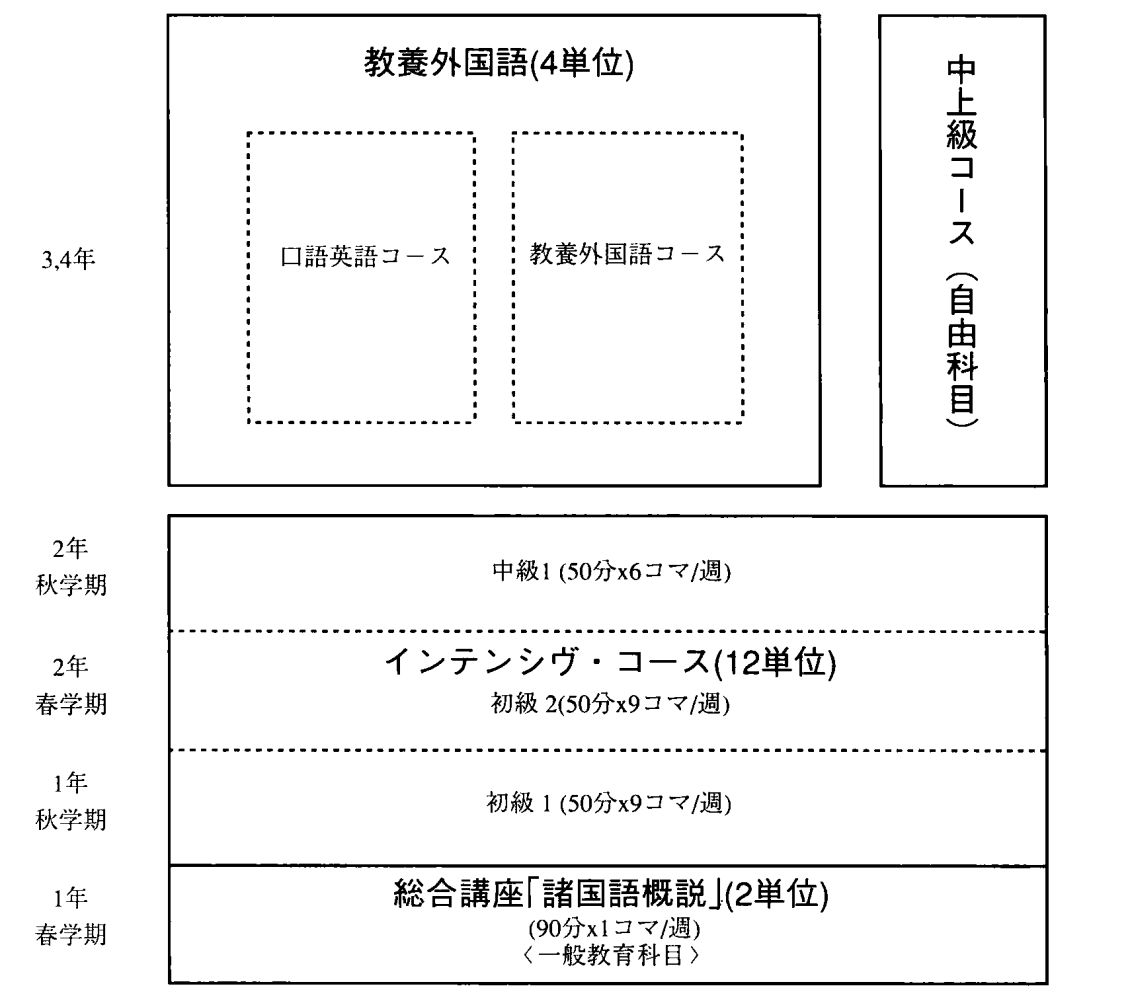
はじめに	7
第1章 総合講座「諸国語概説」とは	9
第2章 SFCにおける外国語教育と総合講座「諸国語概説」の位置づけ	13
第3章 SFCにおける外国語教育プログラム	17
第4章 総合講座「諸国語概説」	21
1. 講座の構成	21
2. 履修語種の選択	22
1) 申告方法	22
2) 履修語種の決定	22
3) 語種別履修希望者数の推移と最終的な履修者数	23
3. スピーチ、パネル・ディスカッション	26
1) ネイティブ・スピーカーのスピーチ	26
2) 日本人教員によるパネル・ディスカッション	26
4. 各国語週間	26
1) 英語	26
2) 朝鮮語	28
3) マレー・インドネシア語	31
4) 中国語	33
5) ドイツ語	37
6) フランス語	39
7) 授業時間外に行われた催し	41
5. 入門コース	45
1) 英語	45
2) 朝鮮語	46
3) マレー・インドネシア語	48
4) 中国語	51
5) ドイツ語	54
6) フランス語	55
第5章 アンケート調査の結果	59
1. 申告語種	59
2. 語種選択の動機	60
3. ネイティブ・スピーカーのスピーチと日本人教員によるパネル・ディスカッション	66

3-1.ネイティブ・スピーカーのスピーチ	66
3-2.日本人教員によるパネル・ディスカッション	67
4.各国語週間	68
4-1.授業	68
4-2-1.授業時間外の催しへの参加度	69
4-2-2.授業時間外の催しへの参加	70
4-2-3.授業時間外の催しについての感想	71
5.各国語週間と語種選択	73
5-1.各国語週間と語種選択との関係	73
5-2.各国語週間の語種選択への影響	74
5-3.各国語週間全般についての感想	75
6.総合講座の貢献度	77
7.技術的な問題	79
7-1.履修申告の時期、方法	79
7-2.レポート	79
7-3.授業時間、場所	79
7-4.その他	80
8.アンケートの質問項目	81
第6章 総合講座「諸国語概説」をふりかえって	85
第7章 インテンシヴ・コース	87
1.レベル、授業時間数および単位数	87
2.クラス・サイズ	87
3.英語	88
4.ドイツ語	93
5.フランス語	98
6.中国語	103
7.朝鮮語	110
8.マレー・インドネシア語	116
9.日本語	119
あとがき	124
執筆者一覧	125

はじめに

本報告書は、1990年に開校された慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス（総合政策学部、環境情報学部。以下、SFCと略す）で初年度に行われた一般教育科目総合講座「諸国語概説」についての報告である。

SFCでは4年間を通じてさまざまな試みが行われることになっており、すでにその一部は進行中である。まず、SFCにおける外国語教育の概略を示そう。



SFCで開講されている外国語は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、マレー・インドネシア語の6言語である。そのほかに留学生に対する日本語が置かれている。

SFCの学生は1年の春学期は全員総合講座「諸国語概説」を受講し、1年の秋学期から3学期間にわたってインテンシヴ・コース（初級1、初級2、中級1）で1外国語を履修する。3、4年では、インテンシヴ・コースで学んだ外国語とは別の外国語を1つ履修する。教養外国語には、インテンシヴ・コースで英語をとらなかった学生を対象にした口語英語コースと、基礎的な外国語の知識を与えると同時に、言語そのものよりもその背景にある文化などに親しむことをねらいとした英語以外の5語種の教養外国語コースが置かれている。また、現段階では自由科目であるが、インテンシヴ・コースで履修した外国語を3、4年で続けて履修する中上級コースも設置されている。

本報告書の主眼は総合講座「諸国語概説」についての報告（第4章）にある。この科目はSFCの外国語教育（第1、2章）の中に位置づけられてこそ意味があるもので、大学における外国語をどう設定し、選択させるかを考える場合、おそらく他の教育機関にも何らかの示唆を与えるのではないと思われる。ただ、外国語教育の試みとしてはいささか独自なものなので、一般の読者の方々にはイメージがわきにくいのではないかという危惧もあったので、ここではSFCの4年間の外国語教育プログラム（第3章）や現在進行中のインテンシヴ・コースのうち、昨年度秋学期の初級Ⅰについての報告（第7章）も加えることにした。さらに、学生の回答によるアンケートの分析結果（第5章）と教員サイドの反省（第6章）を含めた。また、事情は多少異なるが、必要な部分には日本語教育に関する記述も加えた。執筆にはSFCの言語コミュニケーション研究所の専任教員が当たった。

なお、ここではあくまでもSFCの開設年度である1990年度の授業についての報告を中心にしている。しかし、諸々の事情で編集作業が遅れ、刊行が1992年3月までのびてしまった。現時点では2年目の総合講座も終わり、インテンシヴ・コースも2年次の秋学期が終わっている。この間、初年度の反省から改善された点も多い。それらのうち、大きく変わった点は本文中に収めることにした。

大学教育の改革が求められている昨今、大学における外国語教育も自らを変革していなくてはならないときにきている。本報告書がそうした流れを多少なりとも押し進めることができれば幸いである。

1992年3月 総合講座「諸国語概説」報告
編集委員会

第1章 総合講座「諸国語概説」とは

総合講座「諸国語概説」は当初からSFCの外国語教育のプランにあったものではなく、インテンシヴ・コースの内容をつめる段階でふとした思いつきから生まれたものである。従来から外国語というものは入学時の4月から始めることが大学では半ば「常識」とされ、「いつから始めるべきか」という論議は少なくとも慶応義塾大学では皆無ではなかったと思われる。入学式と同時に生協の書籍売り場にはフランス語やドイツ語の参考書、辞書等が山積みされ、教科書売り場には無数の外国語テキストがクラス、担当教員名と共に掲示される。新入生たちが新しいテキストをこわきにかかえて桜の木の下を歩く姿がいかにも新年度にふさわしいキャンパス風景であった。学生自身も、自分の選んだ外国語の教材をワンセット手にし、ABCを習うことによって、あらためて大学生になったという実感を持つものでもあった。

湘南藤沢キャンパスでは、学生たちは「大学で外国語を習う」喜びを半年先の秋学期まで味わうことができない。つまり、春学期は普通の外国語の授業はいっさい行われないのである。こうした一見無謀とも思える改革を断行したのには、次の2つの大きな理由と従来のシステムへの反省がある。

まず第1に、SFCにはマレー・インドネシア語、朝鮮語、中国語、フランス語、ドイツ語、英語の6カ国語がおかれ、1、2年次ではそのうちの1カ国語だけをインテンシヴ・コースで履修することになっているが、入学したての18、9歳の若者に、これだけの数の語種の中から選択をせまることが可能であろうかという疑問が生じた。入学時どころか、入試の願書提出の際に履修希望の第2外国語を選択させる大学さえ少なくない。以前慶應のある学部で行ったアンケート調査でも、「なんとなく独仏のどちらかにマルをつけた」、「親に相談した」という答えが相当数あった。これではまるでパンフレットさえ見ずに品物を購入するのと同じで、特に1カ国語にしばって勉強するSFCのシステムでは、学生個人の将来にまで重要な影響を与える選択を盲目的に強いることになりかねない。

第2に、私たちは現在の大学受験における英語の熾烈な競争の実態を考えた。高等学校の高学年および浪人中の英語教育がコミュニケーション・レベルで行われていれば、入学後ただちにそれに接続する形でのインテンシヴ授業を行うことにも意義があろう。しかし、現実には多くの学生はいわゆる「受験英語」の学習で疲労困憊した状態で入学してくる。若い彼らが頭の中で思い描く大学での外国語教育は、英語であれば受験英語への何らかの積み上げであろうし、フランス語やドイツ語であれば、かつて英語でたどったのとはほぼ同じ道の繰り返しである。それならば、入学後の一定期間外国語の授業は行

わず、ある程度受験勉強の疲れがとれた頃から始めたほうが効果的ではないかと考えたのである。

総合講座の当初の構想は「入学ガイダンス」の延長であった。どんな情報を与えるかはともかくとして、2、3週間はガイダンスを積み重ね、そのあとでゆっくり選択する語種を決めさせようと考えたわけだが、大学設置基準の単位制度とのかねあいもあって、思い切って春学期はすべてガイダンスにしまおうという発想になった。そうなれば各外国語ごとに1週間ずつを与え、自由に自分たちの教える言語の特徴やその文化的背景まで説明することも可能になる。すでに述べたように、学生たちの外国語選択は他人依存型におちいりやすい。入学以前の語種選択では、彼らの各外国語へのぼんやりとしたイメージと親や高校の先生のアドバイスが基準であろう。しかし、こうしたアドバイスは時代や学校差を全く無視している場合が少なくない。一方入学後に選択するのであれば、サークルの先輩などのアドバイスが大きな役割を果たすが、これとともある特定の先輩の個人的外国語体験や、あまり根拠のない風説などにもとづいていることが多い。それよりはまずこれから通うキャンパスがどのようなところであるかを知り、そこで学ぶ学問の一部をかいま見、自分の4年間の学生生活の設計を考えつつ、将来の活動のためのツールとしての外国語選択を自らの意志で行うほうがはるかに悔いの残らぬ決断となるだろう。そしてこの目的は、後に述べる入学時の語種選択アンケート調査の結果と実際の語種選択結果の違いを見る限り十分に果たされたものと考えている。

とはいっても、入学後半年の間に全く外国語の授業を行わないということには一抹の不安があったことも事実である。他のキャンパスでは4月から授業が始まり、例えばドイツ語なら、進度の速いクラスではすでに「現在完了」や「過去形」まで終わってしまっている7月の春学期試験の段階で、「外国語重視」を歌い文句にするSFCの学生は簡単な動詞の人称変化どころか人称代名詞ひとつ知らないのである。日吉や他の大学に進学した友達がどんどん新しい外国語の知識を身につけ、テキストや辞書を片手に通学するのを藤沢の1年生はどんな気持ちで眺めることだろうかなどと考えると、思い切ってこの計画を白紙に戻そうかと悩むこともあった。外国語がなく、春学期の間に学生が時間をもてあます危険性についても心配した。

事実、すでに特定の外国語を学習するつもりで入学してきた学生の中には早く始めたいという意見もあったが、総合講座の過程で自分がとるつもりでいた語種以外にも興味のある外国語が数多くあることを知るようになったのか、こうした不満は思ったほど聞かれなくなった。むしろ毎週の総合講座を聞くたびにその言葉を勉強したくなり、かえって迷ってしまうという効果まで現れ始めた。自然言語（外国語）と並んでSFCではい

わゆる「人工言語」の「情報処理言語」が重要視されているが、こちらの講座が春学期に集中して置かれているのもよかったようである。日常的にはコンピューター・リテラシーの学習と一般教育科目の勉強に忙殺され、総合講座を通じて秋から習う外国語をゆっくりと選択することができた。今となっては逆に、春学期の間に人工言語と自然言語のインテンシヴ・コースが同時並行でスタートしていたら、学生への負担は想像を絶するものになっていたと思われる。

第2章 SFCにおける外国語教育と総合講座「諸国語概説」の位置づけ

SFCにおける外国語教育のデザインをどうするか、あるいはどう具体化されたか、について述べることは必ずしも容易なことではない。そこには総合政策学部と環境情報学部のプランが始まった段階から実にさまざまな討論が重ねられてきたという経緯があり、両学部（ともに文系）設立の基本的なコンセプトとのかかわり方、あるいは専門課程や一般教養との関係、外国語教員の位置づけなど、従来の学部でしばしば問題になってきた複雑な課題を、新しいキャンパスにふさわしく徹底的に見直すという作業が必要とされたからである。一部の大学における「外国語学部」であれば、外国語教育の理想を主目的とすることができるであろう。しかし、多くの大学がそうであるように、ある専門の学問領域を勉強することが主眼で、外国語についてはそれを支援する形でカリキュラムが設計されている場合、1クラスの学生数、時間割や単位数の制約などの条件のなかで、外国語教育の理想を追及することは教員個々人の熱意にもかかわらず、決して容易なことではない。にもかかわらず、日本の大学における外国語教育は社会からの批判にさらされてきたことも事実であり、そうした批判のいくつかは甘受しなければならないだろう。こうした現状の諸問題を分析、検討しながら、総合政策学部と環境情報学部においてどのようにしたら外国語教育の成果をあげられるかをめぐって、鈴木孝夫氏や関口一郎氏を中心に企画委員会、検討委員会、私（井上輝夫）が参加することになった実行委員会などの討議を通じて現在の形ができあがってきたのだった。

まず、外国語を主として教える教員は学部構成員であると同時に、学部づき「言語コミュニケーション研究所」に所属し、両学部の学生を教育するという態勢をとることとした。そして、SFCではまず1,2学年で1外国語を選択し、インテンシヴ・コースで集中的に発信型の言語運用能力を習得し、3,4年次ではもうひとつの外国語（「教養外国語」）の知識を獲得するという4年間にわたる教育を行う方針がたてられた。「実用」か「教養」という根深い対立は本来相矛盾するものではなく、SFCではまず言語のプラクシスを強調することにした。このような大胆な試みが可能になったのは、両学部に「人工言語」とともに「自然言語」教育を積極的に支援する姿勢があったからである。

そして、SFCの大きな特徴は、秋学期から始まるインテンシヴ・コースで展開される語種メニューであろう。実際、どのような外国語を学ぶのか、あるいは教えるのかということはほとんど政策的な重要性をもっているにもかかわらず、今日の日本の大学の現状を考える時、明治以来の脱亜入欧的なパラダイムをそのまま批判なしに温存している

ように見える。はっきり言えば、欧米語優先の思想である。もちろん、今日英語が国際的言語としての役割を果たしているのは明らかで、英語さえ知っていれば研究にはこと足りるという極端な意見も散見される。しかし、これからの日本人は自立的にグローバルな視点をもって、異文化についてのより深い理解を身につけることが望ましいし、さらに日本の地政学的な立場を考えれば、外国語＝英語＝国際化という図式はあまりにも単純だと言わなければならない。そこで私たちは当面の出発点として欧米語3語種、アジア語3語種を同列に配置し、学生たちがそのなかからインテンシヴ・コースを選べるようにした。これは今までの大学における外国語教育では画期的なことである。国際語として常識といってよい英語、EC統合をにらみ、近・現代史を学ぶに欠かせないドイツ語とフランス語、日本語にとって一番言語的に近い朝鮮語、言語的には異質であるが、日本の古典文化や将来のアジア問題にとって重要な中国語、さらに東南アジアの言語、マレー・インドネシア語の6語種である。それに留学生を対象とした日本語が加わる。将来、スペイン語、ロシア語、アラビア語などを加えることも視野に入れながら、SFCでは欧米先進文明から知識を吸収するための外国語ではなく、私たちから世界に向けて発信することができる外国語というコンセプトのもとに、こうした語種布陣が決定されたのであった。

おそらく、こうした理念は観念的にはたやすく理解されるであろう。しかし、現実や学生のニーズを考えた場合、果たして実現可能なのかという疑問がたちどころに浮かんでくる。高校を卒業したばかりの新入生に6外国語をならべてみたところで選択できる予備知識がほとんどないとしたら、英語に志望者が殺到するのは目に見えている。そこで前章に書かれているように総合講座「諸国語概説」（一般教育科目）のアイディアが生まれてきた。そして、実際にこの講座は私たちのポリシーを説明し、啓蒙し、新入生の外国語観を再点検してもらう貴重な講座になったのである。

まず、私たちは総合講座「諸国語概説」のなかで、SFCの外国語教育のポリシーとその実際について全体的なオリエンテーションを行う。それから6語種が、たとえば英語週間、中国語週間というように何々語週間を設定し、その間にそれぞれの言語の言語的、文化的、歴史的背景についての講演やパネル・ディスカッションを開催し、授業時間外にも映画を上映したり、さらに講演を組んだりして、その週間はキャンパス全体がある言語の環境になるよう努めた。学生食堂ではそれらしき料理が出されたり、BGにその国の曲を流してもらったりした。これが6週間続くわけである。そしてこの間に学生たちは秋学期からどの外国語を選択するかを決めるのである。

私たちは各語種のいろいろな条件を考え、英語週間から始めることにした。英語はレ

ベル別のクラス構成となるので実力テスト(TOEFL)をおこない、英語を志望する者はこのテストを前もって受けていなければならない。私たちの初年度の予備調査では、入試合格者1150余名のうち英語志望者は999名に達していた。それゆえ、英語は「総合講座」で横綱相撲をとってもらうことにして、紹介は熱心にもってもらうけれども、積極的な勧誘はある程度抑制してもらうことにした。こうして朝鮮語、マレー・インドネシア語、中国語、ドイツ語、フランス語の順番に週間を開き、アジア語については週間とともに履修受付を開始し、定員がみたされると締め切るという方法をとった。しかし、ドイツ語、フランス語については予想外に志望者数が多いことがわかってきたので、急遽受付を同時に開始することにした。実際、ドイツ語もフランス語も定員を超過したので選抜しなければならなかったが、そこからもれた少数の学生は英語にまわることになったので大きな苦情はなく、ほとんどの学生が第一志望の語種に入ることができた。結果的にはマレー・インドネシア語1、朝鮮語2、中国語4、フランス語4、ドイツ語5、英語19というクラス構成になった。このように、予想以上に語種選択がうまく機能したのは学生の関心の多様化が根底にあると思われるし、総合講座「諸国語概説」を通して刺激された部分もあるだろう。春学期を通して、6語種全体について広い展望を一举に獲得できることは学生にとっても充分興味深いことにちがいない。はじめての試みでもあり、この語種選択の方法をより良く改善するためにいくつかの検討課題が残った。また、今後もアジア言語をポリシーとして支援してゆくとすれば、それぞれの語種の事情にあわせて勘案するというのは現段階では配慮すべき点だと思われる。

こうして語種を決定した学生たちは6月の末から夏休暇の前まで、それぞれの語種の「入門コース」に入ってゆく。英語は秋からの授業のガイダンスを中心にし、大学ではじめて学ぶ言語については基本的な発音や文字の習得を少人数で行った。全体としてみると、総合講座「諸国語概説」は充分機能したのではないかと考えている。

最後に、SFCにおける外国語教育を設計し、実施する「言語コミュニケーション研究所」について今一度ふれておきたい。すでに述べたように、SFCには「総合政策研究所」、「環境情報研究所」という学部にも所属した研究所が置かれているが、「言語コミュニケーション研究所」もそのひとつで、広い意味での言語現象を研究する機関である。言語学、応用言語学、異文化コミュニケーション論、記号論、修辞学、文学、哲学などがその対象となるであろうし、教授法の開発、とりわけCAI (Computer Assisted Instruction) の開発が同時に求められている。いいかえれば、研究所の研究の成果が教育の場にフィードバックされ、研究と教育とが別々のものではなく、相互に弁証法的な関係を保ちながら進められることが期待されているのである。

